

古代文字解読 / 読書案内（古代オリエント篇）

1. 古代文字の解読史に関する概説書

『解読古代文字』（矢島文夫著、ちくま学芸文庫、1999年）

漠然と古代文字の解読に興味を持っている人にとっては、最も読みやすい書。扱っている範囲も、地中海・オリエントからインド・東アジアまで広範囲にわたっている。この書はもと1980年に朝日選書の1冊として刊行されたが、この文庫版では、各章に「補記」として、その後に出た文献の案内などが追加されている。

『古代文字の世界』（モーリス・ポープ著、唐須教光訳、講談社学術文庫、1995年）

内容は以下の通り。

第一部 エジプト象形文字

第一章 ルネッサンス期

第二章 十八世紀

第三章 ロゼッタ・ストーンからシャンポリオンの解読まで

第二部 楔形文字

第一章 ペルシア楔形文字

第二章 その他の楔形文字

第三部 エーゲ海とアナトリアの文字

第一章 キプロス島の音節文字体系

第二章 ヒッタイト象形文字

第三章 エヴァンズとエーゲ海文明文字

第四章 コーバー、ヴェントリスと線文字B

古典学を専門とする著者が、関連する学説史を丁寧に記している。

『古代文字の謎』（C. H. ゴードン著、津村俊夫訳、現代教養文庫、社会思想社、1979年）

著者はセム語学の専門家であり、本書の中にも述べられる線文字Aミノア語の解読を試みた研究者の一人でもある。内容は以下の通り。

第一章 略号と暗号

第二章 エジプト語の解読

第三章 グローテフェントによる古代ペルシア語の解読

第四章 シュメール・アッカドの文化遺産の開花

第五章 楔形文字および象形文字のヒッタイト語

第六章 ウガリト---その解読と影響

第七章 エーゲ海音節文字

第八章 要約と展望

この中で「ウガリト」に一章を割いているのは、著者自身が第一線のウガリト学研究者であることによる。本書の特徴は各言語と文字を、実例を挙げつつ説明している点である。また、第七章では、解読者の一人である自らについて、かなり詳しい伝記があるのも興味深い。なお、訳者はゴードンの弟子の一人でありウガリト学の専門家である。

『古代文字の解読』(高津春繁・関根正雄著、岩波書店、1964年)

ギリシア語および印欧語を専門とする高津氏と、セム語を専門とする関根氏の共著であり、執筆は以下のような分担になっている。

- 第一章 言語と文字 (高津)
- 第二章 エジプト聖刻文字の解読 (関根)
- 第三章 楔形文字の解読 (関根)
- 第四章 ヒッタイト文書の解読 (高津)
- 第五章 ウガリット文書の解読 (関根)
- 第六章 ミュケーナイ文書の解読 (高津)

セム語の一種であるウガリット語と、ギリシア語を記した線文字Bの解読は、この著者たちにとっては同時代的な出来事であり、それだけに記述にも力が入っている。

『失われた文字の解読』 ~ (E.ドールホーファー著、矢島文夫・佐藤牧夫訳、山本書店、1963年)
この種の概説書としては非常に詳しく、具体的に記述されているが、訳文がやや読みにくい。原著は1957年に出版されており(しかし線文字Bに関する部分では1958年の文献が引かれている!?)
この主の書としては最も古いであろう。

2. ヒエログリフ

『ロゼッタストーン解読』(レスリー・アドキンス、ロイ・アドキンス著、木原武一訳、新潮社、2002年)
原著のタイトルは、The Keys of Egypt : The Race to Read the Hieroglyphs (エジプトへの鍵--ヒエログリフ解読競争)である。したがってロゼッタストーンについて述べたものというより、解読者シャンポリオンの詳細な伝記と言うべき書。もちろんライバルのヤングについても詳しく記されている。

3. 楔形文字

『楔形文字入門』(杉勇著、中公新書、1968年)

楔形文字の世界の全体像が分かる、ありがたい書。少し古いが、今でも十分に有用。最近、講談社学術文庫の1冊として復刊されたようである。

4. ヒッタイト語

『印欧アナトリア諸語概説』(大城光正・吉田和彦著、大学書林、1990年)

本書は解読について述べたものではないが、などによってヒッタイト語およびその関連言語に興味を持った人には、お勧めの1冊である。印欧比較言語学にとって特異な位置を占めるヒッタイト語の文法を日本語で読めるのは幸せなことである。

5. ウガリット語

『ウガリットと旧約聖書』(P.C.クレイギー著、津村俊夫監訳、小板橋又久・池田潤訳、教文館、1990年)
20世紀前半シリアで古代都市ウガリットの遺跡が発見され、そこから現れた楔形式のアルファベットで記されたウガリット語文書は、セム語学と旧約聖書学に多大な影響を与えることになった。本書は小冊ではあるが、ウガリット学への導入たりうる、数少ない書である。

6 . 線文字 B

『線文字 B の解読』(J . チャドウィック著、大城功訳、みすず書房、1997 年)

ヴェントリスと共に解読にたずさわった共同研究者が、自ら解読の経緯を述べたもの。原著は第 1 版が 1960 年、第 2 版が 1967 年に出ており、本訳書は第 2 版に基づいて、もと 1976 年に同出版社から出た。しばらく絶版になった後、1997 年に復刊された。「線文字 B」と呼ばれる文字で記された最古のギリシア語は 1952 年頃ヴェントリスによって解読されるが、その数年後彼は 34 歳の若さでこの世を去る。解読に至る道のりは、本書の中に十分に示されている。

『線文字 B 古代地中海の諸文字』(ジョン・チャドウィック著、細井敦子訳、学芸書林、1996 年)

線文字 B がどのようなものかを手早く確認するには、 と同著者による本書の方が便利だろう。本書にはさらに他の地中海文字の解説もある。

以上、古代オリエントおよび地中海の文字に関する書物のうち、日本語で読めるものを紹介した。上に挙げたほかにも、類似の書が多く存在するが、あえて切り捨てた。

この項目は中村雅之が担当しました